

それで初めて行くことだし、粗相があつてはならないと、母親は行儀作法をこまごまと話をして聞かせたんだ。そのうちの一つは、もしよばれてごちそうになつたあと、茶碗に湯をつがれて熱かつたら、たくあんで湯をかきまぜてきましたあと飲むのがよいということだつたんだ。さてばか婿はよばれて湯を飲むときのことを忘れまいとくり返しのみこんで出かけた。ところが、まっ先にわらじばきの泥だらけの足を洗うようにと洗足たらいに湯をいっぱいもつて来られたんだ。ばか婿はここぞとばかり、「たくあんもつてこい。たくあんもつてこい」と大声でよんで、たくあんで湯をかきまわして足を洗つた。しゅうとの家ではこの様子がおかしくて、腹をかかえて笑つたんだ。

### ばか婿のはなし (ホ)

みなみやまのばか婿があるときしゅうとに使いに行つたんだ。そこでしゅうとは婿どのもてなそうとあれこれと気を配つてこう聞いたんだ。「婿どん、なに食うべなあ、手打ちか。それとも半殺しか。みな殺しかな。」ばか婿はそのしゅうとの言葉にびっくりして、あたふたと逃げ帰つた。妻は「とつああ、あんまり早かつたでねえか。なにも食わずにきたのかい。」ときくと「おつかあ、殺されそなつて逃げ帰つたので食うところでねえべい。しゅうとはなあ手打ちか、半殺しか、みな殺しといつたんだぞ。」とつああ、手打ちとはなあ、手打ち蕎麦よ。半殺しはなあ、ぼたもちだべいし、みな殺しはうすもちだべい。」ばか婿はそれを聞いて、よだれを流し惜しかった、惜しかったとつぶやいたんだ。

### ばか息子のはなし (ニ)

むかしむかし、みなみやまにばか息子がいたんだ。年ごろになつたので嫁とりのことになり、山の峠の